

地質系博物館の紹介—韓国地質資源研究院 地質博物館—

<田中 剛¹⁾>



韓国地質資源研究院にも日本の産業技術総合研究所『地質標本館』と同様、国土や世界の地質・資源と環境・防災への取り組みを紹介する『地質博物館』があり、毎日多数の見学者であふれている。この博物館は、2011年11月に開館した韓国で唯一の地質を専門とする博物館である。3部屋の展示室、2部屋の来館者地学発見自演室（後述）に加えて、屋外に広大な展示広場を持つ。この地質博物館は、古生物を専門とする館長の Yuong-Nam Lee博士と2名の研究員、2名の技官の合わせて5名で、月曜日の休館日以外、10時から17時まで公開されており、入場者は間もなく100万人目を迎えるという。以下に地質博物館の特徴に焦点を当て、その展示を紹介する。

写真1

地質博物館南面。2階建て2500m²であるが、他の展示館と同様デザインに凝った建物である。日曜日には、親子連れの手来館者が多い。



写真2

ウィークデーには、小学生から高校生まで、団体での来館者が多く、館内は見学者であふれる。

1) 韓国地質資源研究院, 名古屋大学 年代測定総合研究センター

TANAKA Tsuyoshi (2015) Introduction of Geological Museum in Korea.

写真3

入り口（写真奥）に続くメインホールには、恐竜の骨格標本が多数展示され、来館者の目を引く。アジアの標本に加え、米国やカナダからの標本が展示されている。

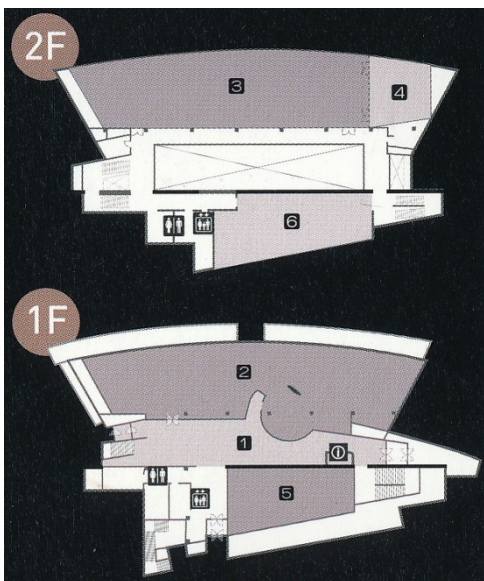
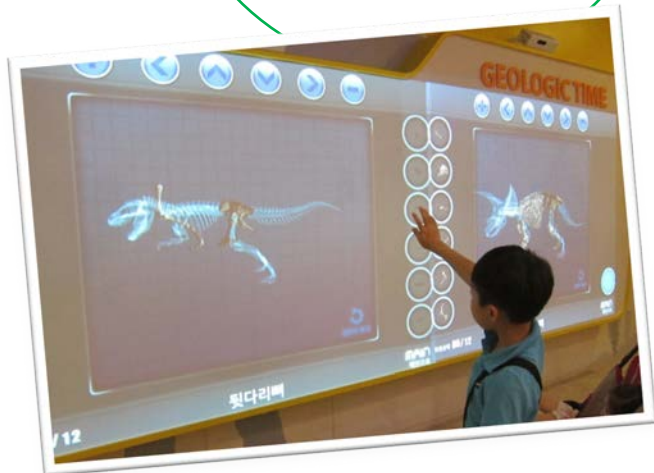


写真4

恐竜は、単なる展示だけでなく、恐竜と翼竜の関係、さらには鳥類への進化など学問的解説によりわかりやすく紹介されている。

写真5

来館者がコンピュータ画面上で、恐竜のバーチャル発掘や骨格の組み立てが試行錯誤できる地学発見自演室もある。この写真は小学生が恐竜骨格を組み立てているところ。2階にはバーチャル露頭からハンマーで岩石を採集し、薄片を作り、顕微鏡で観察する地学発見自演室（Science Room）もある。



【地質博物館の間取り】

- 1 メインホール：恐竜を中心とした展示（写真3）
- 2 1階展示室：地質研究の資源・防災への利用展示（写真6）、古生物展示（写真4）、地球型スクリーンへの投影システム（写真9）
- 3 2階展示室：隕石、岩石・鉱物の展示（写真7、8）
- 4 シアター
- 5 地学発見自演室（化石のバーチャル発掘、写真5）
- 6 地学発見自演室（岩石のバーチャル採集・薄片観察、子供図書室）



写真6

韓国地質資源研究院の業務が、国土の基盤情報として、資源／環境／防災にいかに関与しているか紹介されているが、展示を見るのは大人が多い。

写真7

岩石鉱物の展示は、さまざまな隕石と太陽系の形成についての展示から始まる。2014年3月に韓国南東部・晋州（Jinju）に落下したコンドライト隕石の展示も期待されている。



写真8

宝石鉱物の展示は、ここでも女生徒に人気が高い。



写真9

地球をかたどった球形のスクリーンには、SOS（Science On a Sphere）と称し、複数のプロジェクターからプレートの動きや地震波の伝搬などが投影される。メニューは、引率者（右手前）の手元で選択できる。





写真10

ここ韓国地質資源研究院地質博物館の強みは、広大な芝生の庭を持ち、巨大な岩石・鉱物や化石が展示されていることである。芝生の上では、来館者（生徒）が弁当を広げる風景も見られる。



写真11

博物館内の通路にはミュージアムギャラリーとして、子供達の作品が展示されている。



写真12

芝生の庭にある電気石をふくむベグマタイト標本の表面線量率は $5\mu\text{Sv}/\text{時}$ を超える。

地質博物館は、韓国の研究学園都市テジョンにある多くの博物館の中でも群を抜いて来館者が多い。その一つの理由は、単なる最先端科学の展示紹介だけでなく、『実物に触れることができる』という強みではないだろうか。館長のYuong-Nam Lee博士は、次の企画は、韓国古代における金銀や鉄など資源鉱物の利用形態の復元と動きを持つ古生物（ロボットではない）の展示だ、と未来への意欲を示される。博物館の概要は、<http://museum.kigam.re.kr>（2014/11/28 確認）で見ることができる（韓国語）。